横内・御霊神社の例大祭

添田　悟郎

The regular festival of Yokouchi - Goryo Jinja

Soeda Goro

神奈川県平塚市横内に鎮座する御霊神社では、毎年 9 月の第 3 日曜日に例大祭が執り行われ、御霊神社神輿と囃子の山車が横内地区を巡行する。横内は昭和 41 年(1966 年)に田村から分離独立するまでは、行政上は田村の一部であったが、古くから村としての独自性を持っていたと考えられている。横内の鎮守である御霊神社は中世までは近郷の田村・大神・吉際・戸田(厚木市)の総鎮守とも伝えられ、現在よりもはるかに広い境内を所領していた。この御霊神社の神輿は明治 26 年(1893 年)8 月 15 日に大山の大工・手中明王太郎景元によって造られ、景元はこの神輿の出来栄えを「最上と知るべし」と評価している。とりわけ翼を持った 4 頭の飛龍を屋根の上にのせているのは、歴代の明王太郎神輿の中で御霊神社の神輿一棟のみであり、他に類がない。また、かつて中庭の八坂神社の神輿であった子供神輿も明王太郎の神輿である。ここでは令和元年(2019 年)9 月 15 日に行われた本祭と、前日の宵宮の様子を紹介する。

Goryo Jinja located in Yokouchi, Hiratsuka-shi, Kanagawa-ken holds its annual festival on the fourth Sunday in September; Goryo Jinja Mikoshi and the float for matsuri-bayashi parade through Yokouchi area. Although Yokouchi had been included in Tamura until Yokocuhi became independent from Tamura in 1966, it is thought that Yokouchi had already had the uniqueness of a village since ancient times. Tradition says that Goryo Jinja was the tutelary shrine for Tamura; Ogami; Yoshigiwa; Toda until the middle ages, and had much more large site from now. In 1893, Goryo Jinja Mikoshi was made by Myootaro-kagemoto who was a traditional carpenter in Oyama and he had a highest opinion of its Mikoshi. In particular, it has the four Hiryu with wings on the roof and there is no other one among the successive Myootaro Mikoshi. Furthermore, the children Mikoshi which Ysaka Jinja in Nakaniwa owned before was also made by Myootaro. In this report, I introduce the festival “Honsai” in 15th September 2019 and its previous day “Yoimiya”.

１．御霊神社

「御霊(ごりょう)神社」は横内の鎮守社で、祭神は主神に「崇道天皇(すどうてんのう)」、相殿に「国常立尊(くにとこたちのみこと)」を祀る。当社の由緒によると中世までは近郷の田村・大神・吉際・戸田(厚木市)の総鎮守とも伝えられ、桓武天皇の時代(781～806 年)に征夷大将軍となった坂上田村麻呂が、奥州の蝦夷征討の帰路に京都の「御霊社」から勧請したという。鎌倉時代には三浦義村によって当地に京都の都市計画を模した土地計画がなされ、それによって御霊社の参道を真直ぐに南方の真土境まで延ばし、その村境に「一の鳥居」を設置し、その両側には神社の袖山(そでやま)が設けられていたという。現在は一の鳥居も袖山も消滅して存在していないが、太平洋戦争の終戦直後までは真土との境に蕨山(わらびやま)と呼ばれた松山があったという。当社は鎌倉将軍以降、歴代武将の信仰を集めたといわれている。

天保 12 年(1841 年)完成の『新編相模国風土記稿』によると「御霊社」を田村の小名であった横内の鎮守とし、祭神は「國常立尊」であった。「智正院」持ちで、幣殿・拝殿・神楽殿などがあり、鐘楼には安永 6 年(1777 年)の鋳鐘を掛けていた。末社には「牛頭天王」・「疱瘡神」・「山王(弁天を相殿に置く)」・「弁天」・「金毘羅」・「天神」・「稲荷」があった。明治以降は現在の御霊神社を正式名称としており、明治 6 年(1873 年)8 月に村社に列し、大正 6 年(1917 年)3 月 24 日には神饌幣帛料供進神社に指定された。

図 1-1. 御霊神社

図 1-2. 社殿

明治初期に未完に終わった『皇国地誌』には往古御霊神社は田村・大神・戸田の三村の鎮守であったと記されている。御霊神社は現在よりもはるかに広い境内を所領しており、一の鳥居は八幡塚の辺りに、二の鳥居は八的辺りにあって、現在の県道が御霊神社の参道に当たっていたと言い伝えられている。なお、藤沢市宮

前に鎮座する御霊神社の由緒によると、平塚市の横内にも宮前から御霊を勧請したとあり、当社は天慶3年(940年)に村岡五郎良分が平将門の討伐祈願の為に、京都の御霊神社より勧請したという伝承がある。横内への勧請についてはいずれの伝承も確たる証拠は残されていない。

図 1-3. 藤沢市宮前の御霊神社

図 1-4. 社殿

祭神は『風土記稿』では「國常立尊」であるが、八幡塚・市川武彦氏蔵の明治35年(1902年)5月の『相模国中郡神田村大字田村村社御霊神社由緒調査書』では主神が「崇道盡敬皇帝」に変わり國常立尊は相殿として祀られるようになっている。この『御霊神社由緒調査書』に記された社伝によると國常立尊は地主神として横内の芝原地区に古くから祀られていた神であり、のちに京都から御霊社を勧請して崇道盡敬皇帝を祭神として祀り、相殿に國常立尊を祀ったとしている。御霊社を勧請した理由は田村が京都の街並みに倣って社寺を配置したためと語られている。

記録が遡れる社殿の建立年代については、明治26年(1893年)の『御霊神社古巻物目録』に「棟札　享保九甲辰年七月吉良辰」とあり、享保9年(1724年)と思われる。本殿と拝殿は震災で倒壊して昭和3年(1928年)に再建したが、平成3年(1991年)に本殿が火災で焼失した。地元の大工が欅を使って2年がかりで平成7年(1995年)に本殿を再建したが、再建にあたり1億強の寄付が集まったため、残った経費で社務所を建てた。境内には「御霊神社社殿造営　平成7年3月吉日」の記念碑が立っている。

かつて御霊社の別当寺は御霊社の直ぐ北東200mほどにあった横内山「智正院(ちしょういん)」で、智正院の本尊は十一面観音で村内御霊社の本地仏とされていた。明治の神仏分離令により智正院は御霊社の別当の立場を失い、智正院は大神村の寄木神社別当の寄木山「観音寺」と田村の八坂神社別当の南向山「円光院」と同じ古義真言宗であったため、明治42年(1909年)にこの三寺が合併し、智正院のあった場所に現在の東寺真言宗の明治山「神田寺(かんだじ)」が創建された。

2．境内末社

境内の入り口に社殿に向かって左側に「八坂社」、右側に「神明社」があり、両社とも昭和初期には既に現在地に祀られていたという。八坂社の中宮は相殿になっており、それぞれに木札が納められている。菅原大神を再勧請した明治42年(1909年)の棟札、大山不動の護摩札、明治33年(1900年)の八坂神社の棟札などが収められている。また、神明社の中宮には神明大神御璽の棟札と明治百年記念新築の木札が納められている。八坂社と神明社の祭礼は中庭の八坂神社と同じ7月6日に一緒に行い、宮総代が出席して沖津宮司に祝詞をあげてもらう。この後に宮司は中庭の天王さんの祭りへ行く。

御霊神社の社殿裏手には「水神」があり、木造の社の内部に石祠が納められている。石祠には「〈右〉大正二年二月吉日　〈左〉施主　清水浪三郎　今井順」の銘が刻まれ、石祠手前に五輪塔の水輪が1個置いてある。水神の社の右脇には「〈正〉水神　〈裏〉昭和六拾年参月吉日　氏子中　贈八幡(有)佐野石材店」と刻まれた石碑があり、社の裏手には窪んだ池の跡がある。地元住民の話では横内字水神戸にあった水神を水利土木役員が土地を売却したために御霊神社へ遷し、暫く境内の隅に置かれていたが、水利土木役員に不幸が起きた為に境内に社を造って祀ったという。

図 2-1. 八坂社

図 2-2. 神明社

図 2-3. 水神

図 2-4. 池跡

3．横内の歴史

横内は昭和41年(1966年)に田村から分離独立して大字横内となるまでは行政上は田村の一部であり、西田村と称することもあった。しかしながら、『風土記稿』の田村の小名として「△横内　本村の西にありて、二区をなし、宛も別村の如し」と記されているように、当時から村としての独自性を持っていたことが伺える。

横内の地名について元横内公民館長の浜田重雄氏の研究によれば、大化の改新(645年)の際に田村の余った戸数を分村し、「余戸(アマベ)」と称したものを音読して「ヨコ」と呼び、「余戸地(ヨコチ)」が転訛して「横内(ヨコウチ)」になったという。横内地区の南西端部に新しく造成された団地の名称を付ける際には、住民の強い要請によって「横内団地」と命名されている。

横内の戦前の戸数は150～160軒で、令和2年(2020年)1月現在は3,665世帯で8,242人の人口である。横内は南北で上(カミ)と下(シモ)に大きく二分され、さらに町内(チョウナイ)と呼ばれる家々のまとまり(区分)が10ある。町内にはそれぞれ名前が付いていて、北から「北庭(キタニワ)」・「(カミの)東庭(ヒガシニワ)」・「西庭(ニシニワ)」・「ヨツヤ」・「通り町(トオリチョウ)」・「八的(ヤツマト)」・「(シモの)東庭(ヒガシニワ)」・「中庭(ナカニワ)」・「八幡塚(ハチマンヅカ)」・「新田(シンデン)」である。八的以北の6町がカミで、(シモの)東庭・中庭以南の4町がシモであるが、北庭・(カミの)東庭・西庭・ヨツヤ・通り町の5町をまとめてカミと呼ぶこともあり、新田は横内のカミから分家した家が多いという。この町内組織は道祖神を祀る家のまとまりと重なっている。

平成16年(2004年)の横内連合自治会は第一から第五までの自治会で組織され、第一は通り町以北のいわゆるカミ、第二は八的、

第三は(シモの)東庭と中庭、第四は八幡塚、第五は新田である。以前は第四自治会までであったが、戸数が増えた為に八幡塚と新田を分けたという。また、自治会のことを町内と呼ぶ人もあり、この5つの区分が宮総代の選出単位にもなっている。自治会の組織は生産組合が基になって作られており、生産組合は第四生産組合まであり、自治会が4つであった頃と同じ区分である。なお、横内団地は別に8つの自治会を組織している。

4．祭礼の歴史

御霊神社の祭礼日は『風土記稿』と『御霊神社由緒調査書』では共に8月20日としており、明治中頃までは変わらなかったことになる。その後は9月20日に固定したが、昭和初期のある年に養蚕の関係で忙しいという理由で、祭日を20日の前後で移動させるという案が持ち上がった。この案に対しては意見が二つに割れ、最終的には祭礼を2回実施した年があったが、村に災難が起こったために翌年から元通りの20日に戻したという。平成7年(1995年)からは祭礼日が9月20日近く(20日以前)の日曜日に変わったが、ハッピーマンデー法により敬老の日が9月第3月曜日になると、三連休に合わせた第3日曜日に行われるようにった。

かつての祭礼では8つの的を射る流鏑馬が行われ、その8つの的が設けられた場所に「八的(やつまと)」という地名が付けられた。この八的については『皇国地誌残稿』の中に、「相伝フ往古御霊神社ノ三ケ村(田村・大神村・戸田村)ノ鎮守タルトキ毎年例祭ノ祭神事鏑馬ヲ執行セシシテ　今開墾シテ田畑ト成ルト云フ該地古跡ニ因テ字スト云フ」と記されている。なお、例祭に立てる幟竿は昔、荷車で七沢まで行って運んできたものという。

昔は神輿を白丁と町代が白丁着で担いだが、担ぎ手が多く喧嘩になることもあったという。かつて横内と田村は一つの村であり、お互いの祭りには神輿を出して相手地区まで出掛けていた。横内では戦後しばらくは田村の渡し手前の河原まで渡御し、田村の八坂神社の前にお宮の世話人が2人くらい出ており、御神酒をごちそうになったりした。田村へ行くと田村の人も担いだので担ぎ手が多くなったが、田村から離れて再び横内の者だけになると人数が減り、前棒を4人くらいで担がなければならいこともあった。反対に田村の八坂神社の祭礼時には八坂神社神輿が御霊神社まで渡御し、横内でも御神酒を出してもてなしたという。

5．祭祀組織

「青年会」は15歳から45歳までの横内生まれの者が加入でき、イセキ(跡取り)は必ず入会していた。次男以下は希望者が入り、奉公人は入らない決まりであった。会に入ると親の代わりに村仕事に出て一人前に見られた。会では縄の品評会などをしてその縄を村人に売ったり、女竹を刈って売るなどして会の費用とした。また、大正12年(1923年)頃には青年会所を作るために1日1厘貯金をした。青年会の仕事は神社の祭礼の準備や余興の準備、道普請、消防などを受け持った。16・17歳になって16貫の俵が担げないと皆にバカにされ、休みの日には集まって力比べをし、土俵や墓地の石塔を担いだりして力をつけた。

「青年団」と呼ぶようになってからは加入が25歳までとなり、昭和初期からはその加入式が正月15日であった。大正12年以前は西福寺の本堂で、それから後は青年会所で行うようになり、酒を出して挨拶をした。御霊神社の祭礼では演芸的なものは青年団が段取りをし、戦後まで歌舞伎を上演していた。横内は歌舞伎が盛んだったという。

宮総代は以前はカミとシモから2名ずつ、計4名選ばれていた。生産組合が基準になっていて、カミから1名、八的から1名、東庭と中庭から1名、八幡塚と新田から1名出ていた。現在は戸数が増えたため八幡塚と新田から1名ずつ宮総代を出すようにし、計5名で任期は3年である。祭りにはこの他に各町内の代表である町代が17名出て、町代は順番制で2年交代である。更に自治会長6名、生産組合が取り仕切る水利土木役員4名、神輿保存会と太鼓連が協力して祭礼を運営している。

6．宵宮

6-1. 準備

ここからは令和元年(2019年)9月14日(土)に行われた宵宮の様子を紹介する。本祭の前日は朝8時に集合し、午前中は神輿の振り掛けや境内の飾り付け、模擬店用のテント張りや前夜祭に向けたステージの準備などが行われる。昼過ぎからは社務所にて粽(ちまき)作りが行われる。

図 6-1. 提灯の門飾り

図 6-2. 神楽殿の花道設置

図 6-3. 子供神輿の振り掛け

図 6-4. 忌竹の設置

図 6-5. テントの設置

図 6-6. 粽作り

6-2. 太鼓演奏

午後は15時過ぎから境内で太鼓連による太鼓演奏が行われ、前夜祭に向けて模擬店の準備が進められる。模擬店では地元の氏子が協力して子供のおもちゃの他、ポテト、フランクフルト、かき氷、生ビールを販売する。

図 6-7. 太鼓演奏

図 6-8. 模擬店の準備

6-3. 前夜祭

18 時からは神楽殿にて前夜祭が行われ、約 40 の演目が 4 時間に渡って披露される。演目は御霊神社太鼓連の演奏から始まり、楽器演奏やフラダンス、舞踊やカラオケなどが行われる。前夜祭の途中では子供神輿が境内だけで担がれ、最後の御霊神社神輿保存会の甚句の時にも同様に子供神輿が担ぎ出される。全ての演目が終了すると、神輿保存会の三本締めで前夜祭は 22 時頃に幕を閉じ、片付けを終えて解散するのは 22 時 30 分頃となる。

図 6-9. 前夜祭は太鼓連から

図 6-10. 観客で賑わう境内

図 6-11. 模擬店は氏子が運営

図 6-12. カラオケで盛り上がる

図 6-13. 子供神輿を担ぐ

図 6-14. 三本締めで幕が閉じる

7．本祭

7-1. 準備

ここからは令和元年(2019 年)9 月 15 日(日)に行われた本祭の様子を紹介する。本祭当日は朝 6 時に集合し、神輿の捩り掛けや式典の準備が行われる。

図 7-1. 神輿の捩り掛け

図 7-2. 式典の準備

7-2. 式典

本祭の準備が終わると境内では忌明け祓いが行われ、8 時 30 分からは社殿にて大神の寄木神社の宮司を祭主として神事が執り行われる。神事が 9 時に終了すると社務所では直会が行われる。9 時 30 分からは神輿前で祭壇が準備され、御霊入れと神事が執り行われる。なお、神輿渡御の応援のために参加する友好団体は、順番に神輿保存会のテントで受付けを済ませる。

図 7-3. 忌明け祓い

図 7-4. 例大祭の式典

図 7-5. 社務所で直会

図 7-6. 友好団体の受付け

図 7-7. 御霊遷し

図 7-8. 神輿での神事

7-3. 宮出し

神輿での神事が終わると御霊神社神輿保存会の司会進行で宮出しに向けて式典が行われ、横内の各団体の代表者の挨拶に続き神輿の友好団体の紹介があり、一本締めで 10 時 10 分頃に神輿が御霊神社をお立ちする。

図 7-9. 友好団体の紹介

図 7-10. 一本締め

図 7-11. 神輿の宮出し

図 7-12. 山車が行列を先導

7-4. 神輿渡御

御霊神社をお発ちした神輿はここから約 9 時間掛けて横内地区を渡御して行く。鳥居を抜けた神輿は左折して県道 44 号(伊勢原藤沢線)を田村方向へ進み、横内交差点で右折してバス通りを通って横内地区を南下して行く。神輿渡御の行列は囃子太鼓の山車を先頭に触れ太鼓と幟旗等が続き、最後尾が神輿となっている。なお、山車は鳥居ではなく境内の裏側から出入りする。

一行は小品盆栽専門店の湘風園で最初の休憩を取り、横内の最西端となる下島境まで移動して引き返すと氏子宅前で休憩を取る。ここには八坂神社が鎮座しており、神輿では神事が執り行われる。

図 7-13. バス通りを南下

図 7-14. 湘風園で休憩

図 7-15. 下島との境を引き返す

図 7-16. 八坂神社前での神事

一行は再びバス通りに出て南下すると、神輿保存会結成の記念渡御での出発場所でもある今井石油で休憩を取る。なお、横内では各休憩場所で飲食物が振る舞われるため昼食時間は設けられておらず、各休憩所では 15 分程度の休憩を取りながら渡御を続けて行く。今井石油を出発した一行は県営横内団地前で引き返し、氏子宅前で休憩を取って再びバス通りへ戻っていく。なお、休憩後は暫くレディースタイムとして前棒を女性だけで入り神輿が担がれ、レディースタイムは宮入り後にも設けられた。

図 7-17. バス通りを南下

図 7-18. 今井石油をお立ち

図 7-19. 横内団地横を通過

図 7-20. 休憩後のﾚﾃﾞｨｰｽﾀｲﾑ

この辺りは横内地区のほぼ最南端となり、直ぐ南隣は真土地区となる。一行はバス通りへ戻るとバス通りの東側に入り、今度は北へ向かって移動する。かつては神輿を終始担いで渡御していたが、近年は部分的に台車での移動を入れながら横内地区を渡御している。

図 7-21. バス通りへ戻る

図 7-22. バス通りの東側へ入る

図 7-23. 伊達建設で一本締め

図 7-24. 台車での移動(横内小)

一行は JA 湘南横内支店での休憩を終えると、ここからはバス通りを使いながら北上していく。横内交差点まで引き返してきた一行はお宮へは戻らず県道 44 号を右折し、平塚市消防署神田出張所の手前で左折し、更に北へ進んで神輿保存会の会長宅で休憩を取る。ここでは夜の渡御に向けて提灯の電球が点灯される。

図 7-25. JA でバス通りへ戻る

図 7-26. 横内交差点で県道へ

図 7-27. 会長宅前で神輿を揉む

図 7-28. 提灯を点灯

一行は渡御経路で最北端となる東海道新幹線の高架手前で引き返し、明治山神田寺付近にある氏子宅の敷地で最後の休憩を取る。ここでは忌竹内に神輿が納められ、神輿では神事が執り行われる。神輿渡御での休憩場所は全部で 10 ヶ所あり、最後の休憩場所ではこの日で最長となる 30 分程の休憩を取る。

一行は空が薄暗くなる 18 時 15 分頃に出発し、高張提灯と役員の手持ち提灯に先導された神輿は、横内交差点で県道を右折して御霊神社を目指す。なお、囃子太鼓の山車はこの休憩所には寄らず一足先にお宮へ戻り、神輿の宮入りまでは境内で太鼓を演奏する。

図 7-29. 高架手前で引き返す

図 7-30. 神田寺を通過

図 7-31. 山車は先に宮入り

図 7-32. 神輿前で神事

図 7-33. 一本締めでお立ち

図 7-34. 横内交差点を右折

7-5. 宮入り

神輿は一旦鳥居前を通過し、東海道新幹線の手前で引き返してから 19 時頃に鳥居を通過して宮入りする。鳥居を潜ると直ぐに鳳凰の足元から奠の綱が伸ばされ、宮司の手で誘導されながら神輿は参道を社殿へ向かって進んで行く。なお、平塚市内で奠の綱で宮入りする地区は四之宮・田村・大神を合わせた 4 地区だけである。神輿は甚句を交えて境内で 30 分程揉んで輿をおろすと、最後は神輿保存会会長の三本締めで神輿渡御に幕が下りる。

図 7-35. 新幹線手前で引き返す

図 7-36. 鳥居を潜って宮入り

図 7-37. 宮司が奠の綱を引く

図 7-38. 境内で神輿を揉む

図 7-39. 社殿前で甚句を入れる

図 7-40. 輿をおろして三本締め

7-6. 粽配りと直会

神輿が宮付けされると神輿から御霊が本殿へ遷され、神楽殿からは町代によって粽が撒かれる。各団体はそれぞれ直会を行い、神輿保存会は友好団体を一本締めで見送る。本祭は 21 時過ぎに解散となり、翌 16 日(月)には片付けと鉢洗いが行われる。

図 7-41. 御霊遷し

図 7-42. 神楽殿から粽を撒く

図 7-43. 友好団体の見送り

図 7-44. 神輿保存会の直会

7-7. 演芸フェスティバル

神輿渡御の際中は 15 時から宮入り前の 18 時 30 分まで、神楽殿にて演芸フェスティバルが開催され、楽器演奏や歌、ダンスやじゃんけん大会などが催される。この演芸フェスティバルは平成 30 年(2018 年)から始められたもので、平成 27 年(2015 年)までは一座を呼んで芝居が行われていた。なお、本祭では綿菓子や輪投げなど 4 つの的屋が出店した。

図 7-45. 演芸フェスティバル

図 7-46. かつては芝居を呼んだ

8. 神輿

8-1. 御霊神社神輿

御霊神社の神輿は明治 26 年(1893 年)8 月 15 日に大山の大工「手中明王太郎景元」によって造られ、当初は素木(しらき)の神輿であり、元来は飾り神輿であったともいわれる。明治 30 年(1897 年)に塗り・彫刻・金物の追加工事の注文を受け、神輿新造の時よりも手間と時間と費用をかけて、1 年後の明治 31 年(1898 年)8 月 28 日に完成した。景元は自分の造った神輿の出来栄えを一つ一つ評価して書き残しており、その中でこの御霊神社神輿を「上作なり、最上と知るべし」と評価している。

図 8-1. 御霊神社神輿

図 8-2. 飛龍の彫刻

その後は長い歳月に渡って横内の人々に担がれ続け、昭和 63 年(1988 年)9 月 3 日に東京浅草の宮元卯之助商店にて修復が行わ

れ、再び新しくなり現在に至っている。因みにこの年は神輿保存会の 10 周年にあたり、御霊神社神輿の新造 100 周年を兼ねた記念行事に合わせて修復されている。

御霊神社の神輿は見所が多いが、とりわけ屋根の上の翼を持った飛龍の箔置き彫刻が目を引く。龍は 4 頭いていずれも翼を広げ、天をかけているような姿である。屋根の上の飛龍は歴代の明王太郎神輿の中で御霊神社の神輿一棟のみであり、他に類がない。この飛龍の彫刻は契約時(明治 26 年)の彫物仕様書に記載が無く、追加工事の際に、明治 30 年(1897 年)に朝日神社神輿(秦野市東田原)の彫刻と一緒に(埼玉県)上尾市大谷本郷の名彫師として知られた山田弥三郎に依頼した。

横内の御霊神社では神輿保存会の結成 10 年毎に記念行事を行っており、平成 30 年(2018 年)は 40 周年に当たる年で、11 月 4 日(日)に御霊神社神輿の記念渡御が行われた。御霊神社神輿は明治 26 年(1893 年)の新造から平成 30 年(2018 年)で 125 年を迎えたが、5 年前倒しで新造 130 周年記念とし、保存会の結成の節目の年と合わせて 10 年毎にお祝いをしている。

記念行事当日は御霊神社で神事が執り行われたのち、御霊神社神輿が太鼓連の山車に先導されて 3 時間ほど横内地区を渡御し、最後に保存会神輿と共に宮入り、その後は直会が開かれて終了となった。

図 8-3. 御霊神社での神事

図 8-4. 今井石油での式典

図 8-5. 横内地区を巡行

図 8-6. 宮入する 2 基の神輿

8-2. 子供神輿と中庭の八坂神社

手中明王太郎家史料によると横内の子供神輿は、明治 30 年(1897 年)8 月 21 日に神田村横内の子供神輿として製造された。この史料は神輿各部の仕様と見積が記された書類で、大工の工賃 97 人半分の工賃で 48 円 75 銭、彫物代 16 円、金物代 14 円＋7 円 50 銭、塗方代 30 円、木代 10 円、〆て総額 126 円 25 銭になるとみられ、これは大工のおよそ 250 日分の収入に相当する代金とみられる。横内の子供神輿はもともと中庭の八坂神社の神輿であったと言われている。

中庭の八坂神社は天王さんと呼ばれ、その起源については諸説存在する。昔、横内に疫病が流行ったときに小宮克己家の五代前の祖先が、京都の八坂神社から御霊を勧請したといい、八坂神社で疫病を祓ってもらい、御霊を請けてきたという。また、伊勢参りに行った人が京都から天王さんを勧請してきたともいい、昔は八的の天神様の所に祀ってあったという。別の話者によると町内で悪い疫病が流行ったために、御霊さんの天王さんを遷して祀ったところ悪い病気が無くなったことから、中庭の八坂神社の本社は御霊神社の天王さんであるという。

図 8-7. 子供神輿

図 8-8. 中庭の八坂神社

中庭の八坂神社は中庭と大西の 25 軒ほどが氏子で、かつては 6 月 6 日がアタリビ(祭礼日)であったが、戦前から 7 月 6 日になった。祭礼に立てる幟は昭和 32～33 年頃に書かれたもので「津島神社」と書いてあり、明治 35 年(1902 年)の『御霊神社由緒調査書』にも御霊神社の摂社の中に「津島社(牛頭天王トモ称来ル)」があることから、津島社が現在の八坂神社に当たると推測される。

平成 10 年(1998 年)頃までは横内の子供神輿は担がれていなかったが、平成 11 年(1999 年)から大神輿の宮立ちと宮入り時に担がれるようになり、宮立ちでは神輿保存会に、宮入りでは子供会等によって担がれていた。宮立ちした子供神輿は横内交差点で左折し、現在の最後の休憩場所(神酒所)に安置され、夕刻になると大神輿と一緒に子供神輿もお立ちし、宮入り直前で新幹線のガード下で一旦おろして、その後宮入りをした。子供神輿が例大祭で担がれたのは平成 20 年(2008 年)頃までで、暫くは神輿殿に収められたままであったが、数年前から宵宮の余興に合わせて境内で担がれるようになっている。

8-3. 保存会神輿

御霊神社にはお宮が所有する明王太郎作の大神輿と子供神輿の他に、神輿保存会が所有する練習用の神輿があり、例大祭前に境内で神輿担ぎの練習が行われる。練習は例大祭前の 2 ヶ月間に渡って毎週土曜日の 18 時 30 分から 21 時頃まで行われ、休憩を挟みながら参道を往復する。練習には近隣の平塚市四之宮や田村などの他に茅ヶ崎市からも担ぎ手が参加し、友好団体の交流の場ともなっている。なお、保存会神輿は年末年始にも境内で担がれる。

図 8-9. 保存会神輿

図 8-10. 神輿担ぎ練習

9．囃子

横内では御霊神社太鼓連が組織されており、囃子太鼓を伝承している。演奏する曲目は「おはやし(屋台ばやし)」・「宮昇殿」・「きざみ」・「にんば」の 4 曲で、楽器の構成は締太鼓 4・大太鼓 1

で、笛は無いが鉦は時々入る。横内の囃子は昭和 60 年頃から始まったと言われるが、それ以前は祭りで太鼓を叩くことはなかったようで、御霊神社の神様は太鼓のうるさいのが嫌いだとも言われていた。

図 9-1. 山車

図 9-2. 締太鼓は 4 個並ぶ

横内では例大祭に向けて平塚市立横内中学校の体育館で太鼓の練習が行われる。令和元年(2019 年)の練習は 7 月 21 日から 9 月 8 日の各日曜日(8 月 4 日・11 日は休み)で、基本的な練習時間は 18 時 30 分から 20 時までとなっている。練習初日と最終日は太鼓の革締め作業が行われ、最終日は朝から山車の飾り付けも行われる。

図 9-3. 横内中学校の体育館

図 9-4. 太鼓の練習

図 9-5. 前に譜面を置く

図 9-6. タイヤでも練習

１０．むすび

筆者が横内の御霊神社の祭礼に興味を持ったきっかけは、歴代の明王太郎作の神輿の中で唯一の飛龍を装飾した神輿を御霊神社が所有していることであった。実際にその神輿を目の当たりにすると、飛龍の圧倒的な存在感、全体的なバランスの良さと美しさは想像以上のものであった。更に、取材を通じて子供神輿も明王太郎が手掛けたものであることを知った時には非常に驚かされた。子供神輿と言ってもその重厚感と見事な彫刻からは、もはや子供神輿の領域を超えているように感じられる。

筆者は神輿について十分な知識を持ち合わせていないが、横内以外に明王太郎作の子供神輿が存在することを聞いたことがない。更に練習用とはとても思えない立派過ぎる保存会神輿まで所有しており、総合的な神輿の価値という観点では横内を越える地区を挙げることは容易ではない。

この素晴らしい 3 基の神輿を所有する御霊神社の歴史を調べて行くと、中世までは近郷の田村・大神・吉際・戸田(厚木市)の総鎮守とも伝えられていることには何の疑いも持っていなかったが、手持ちの『新編相模国風土記稿』でいくら探しても横内村の項が無く、最終的に田村の一部であったことに気付いた時は、明王太郎作の子供神輿の存在以上に衝撃を受けた。

田村では平塚市の無形文化財に指定されている田村囃子が伝承されているにもかかわらず、横内では祭り囃子を始めたのが昭和 60 年頃と最近のことであり、しかも横内の囃子の系統は田村囃子とは異なる平塚市内で広く伝承されているいわゆる平塚囃子である。筆者は囃子に関してはある程度の知識を有しているが、横内の囃子は平塚囃子の中でも独特な間を持っており、御霊神社の勧請の由来と共に非常に興味のある点である。

いずれにせよ、横内の御霊神社の祭礼はその歴史の深さを象徴しているかのように、神輿と囃子共に非常に盛大に行われており、今後もこの素晴らしい祭礼が末永く後世に引き継がれていくことを祈願したい。

○参考文献

1. 『平塚市史民俗調査報告書 1　-神田・城島-』
平塚市市史編さん課　(1981)
2. 『新編相模国風土記稿　第二巻』　雄山閣　(1985)
3. 『相模の神輿　-神奈川の神輿-』　監物恒夫　(1985)
4. 『平塚における地名の由来について』
平塚市市民部地域づくり課　(1990)
5. 『平塚市史 12　別編　民俗』
平塚市博物館市史編さん係　(1993)
6. 『宮大工の技術と伝統　神輿と明王太郎』　手中正　(1996)
7. 『ふるさと再発見　～神田・城島地区を訪ねて～』
平塚市観光協会　(1998)
8. 『平塚市文化財調査報告書　第 34 集 平塚市神輿・屋台調査』
平塚市教育委員会　(2003)
9. 『平塚市の地名と伝承』　小川治良　(2004)
10. 『神仏と祭りの伝承 1 -神田・城島-』　平塚市博物館 (2004)
11. 『平塚のお祭り　-その伝統と創造-』　平塚市博物館 (2005)
12. 『平塚の石仏 改訂版 6 神田地区編』石仏を調べる会 (2009)
13. 『平塚市史 13 上　別編　寺社(1)』　平塚市博物館　(2018)

作成 ： 2020 年 2 月